# かさおか

発行所
天理教笠岡大教会
かさおか編集掛
笠岡市用之江377
郵便番号714-0066
（0865）
電話 66−1311
FAX 66−1314

剪定作業中（天理）

## おつとめ奉仕者の増員

・一人ひとりが日々に真実を尽す
・布教によるおつとめ奉仕者の増加
・後継者講習会への参加による奉仕者の増加

立教170年
12月号

# 秋季大祭講話　大教会長様

## よふぼくとしての理づくりを…

昨年、秋の大祭で、立教の元一日、人間創造のとき、そして、明治二十年の御身お隠しのときという三つの大きな角目のときは、全て、をやの声をいただき、そのをやの声を素直に受けて、そして、全てのご守護の元が始まっている、旬々にしっかりをやの声を聞いて勇んでかかることが大事だと、お話しました。

また、今年の春の大祭には、教祖百三十年祭に向けての今年の歩みについて、「真心の御供」という一節を紹介して、自分の理を立てて通るのではなく、先ずをやの理をしっかりと立てて日々通ることの大切さをお話しました。

百三十年祭に向かっておつとめ奉仕者をご守護いただくために、一人ひとりが日々の中で、をやに対する喜び・感謝の気持ちを持って、しっかりと真実の種まきをしようとお話ししましたが、今日はそれに関わって、よふぼくとしてのつとめ方について、お取り次ぎいたします。

## お入り込みいただけばこそ

おさづけの理を頂戴することによってよふぼくになりますが、

たんくとよふぼくにてハこのよふを
はしめたをやがみな入こむで　十五号 60
このよふをはじめたをやか入こめば
どんな事をばするやしれんで　十五号 61

と仰せいただくように、私たちよふぼくは、をやに入り込んでいただいて初めて、たすけの理を現わすことができます。

よふぼくになったら無条件で入り込んで働いてくださるのではなく、よふぼくになりよふぼくとしての理づくりをさせていただくことによって、入り込んでお働きいただくという術がなされるのではないかということです。

教祖に、親神様が入り込んで働いてくださって、陽気ぐらしに向かうひながたを御自らお通りくださった。そして、その中での理づくりは、先ず貧に落ち切る、また、貧に落ち切ることによって、親神様のご守護の世界だと自ずと解ってくる。その一つひとつが、親神様の思召に添ってしっかりと歩んでいく理づくりの道を歩まれたひながたでもあろうと思います。

そうした時に、私たちはそのひながたをひながた通りと歩ましていただくお互いとして、改めて思案しなければなりません。

よふぼくとしておさづけの理をいただいたその日の心が、澄み切った心で、何でもどうでもこれからは日々理づくりに励み、親神様・教祖に入り込んでいただいて、たすけ一条に励もうと思うなら、それこそ、よふぼくになった元一日になるでしょう。

しかし、私自身も、おさづけの理をいただいたその日にどんな感激があったか、正直申して覚えておりません。これは大変申し訳ないことは確かですが、自分では思っていないところの心の部分を親神様がちゃんとお受け取りくださって、おさづけの理をくださることができたんだなと、改めて思っている、そんな状況です。

ですから、よふぼくだから、つとめしておさづけすれば神様が働いてくださるかといえば、なかなかそうはいかない部分があるのではないか。それなら、よふぼくとなったら、よふぼくとしての理づくりも日々しっかりとしながら、にをいがけ・おたすけにかからなければ、入り込んで働くという姿にはなってこないと思います。

## よふぼくとしての理づくり

では、お互いよふぼくとしてどういうふうに理づくりをしているかということ、これは、実は今年の春の大祭のときのお話につながってきます。

日々、親神様が陽気ぐらしせよと絶え間なしにご守護くださっている。今日もおいしそうな里芋やら柿やら一杯旬々に与えていただいて、これで味わって陽気ぐらしをしてくれよと、その一つ一つを、有り難い嬉しいと日々喜ぶ。もちろん、それが大事です。しかし、それは、子としての喜び・子供としての理づくりであって、よふぼくとしての理づくりとは意味が違うと思います。

そうしたときに、先人たちが、どうやってよふぼくとしての理づくりをしてこられたのか、改めて温ねてみると、決して特別なことは何もなされていないことに気づきます。

そもそも、教祖御在世当時、直々にさづけを戴かれた人たちが、どの辺を見定められて、教祖からおさづけの理を頂戴されたのかを考えてみると、ただ、

たすけていただいたその喜び一つだけ、ご恩返しをしたいその心だけで、教祖のところに日参に近いかたちで、とにかく、親元へ親元へと足を運ばれた。

例えば、増井りん先生は、お屋敷に住み込むようになられてから、お屋敷に包丁が無いということで、大阪から包丁を買って帰られた。をやに対するほんのわずかな気遣いを親元に帰ることによって気づき、そしてほんのわずかな部分で心を運んだ理によって、おさづけの理を頂戴したということです。飯降伊蔵先生も同じです。

当時おさづけの理を戴いた多くの方々は、ただ親元へと足を運び心を運んだ、その中で気づいたところを、ああしようこうしようと、その一つひとつの気遣いを教祖にお喜びいただき、赤衣やいろいろなさづけを授けられました。

ところが、中には、助造事件というのがありますが、

福住村へ道がつき、多くの人々が相次いで参詣して来た中に、針ケ別所村の助造という者があった。眼病を救けられ、初めの間は熱心に参詣して来たが、やがて、お屋敷へ帰るのをぷっつりとやめて了ったばかりではなく、針ケ別所村が本地で、庄屋敷村は垂迹である。と、言い出した。（教祖伝 第四章）

と教祖伝に記されております。

お互いしっかり思案しなければならないのは、最初の内はそうやって足を運んでいたけれども、段々に足が遠のくということ。これは、よふぼくとしてはしっかりと思案しなくてはいけない問題だと思います。

をやに入り込んでいただくということは、をやに働いていただくということですから、常にをやに働いていただけるような理づくりを、日々の中でしなければならない。その一番肝心な角目が、先ず、心を運び足を運ぶことです。

## をやに足を運び心を尽くす

動もすると、もうよふぼくなんだから、月に一回、上級の祭典だけ足を運びおつとめだけつとめて、後はただにをいがけ・おたすけだけすればよいということになりかねない。あるいは、をやから声が掛かったときに、自分の都合が先についてしまって、をやの御用が後回しになったりという一つひとつの事柄は、今申した心が通わない足を運ばないという理にも繋がってくるでしょう。

先ずをやありき、そして、をやに働いていただくためには、いかにをやに対して理づくりをしていくか、その理づくりはそんなに難しいことではなく、ただ心を運び足を運ぶ機会を一回でも多くする、その理を作るのが大事だと改めて心に置かなければならないと思います。

自分が動くのですが、飽くまでをやに働いていただくという思いをしっかり心に置いて、共々によふぼくとして、をやに働いていただけるようなをやに対する理づくりを、これからしっかり積まなければならないと思います。

## 根に肥をしてこそ枝葉は繁る

最近、教会事情等を見ても、それにかかわることが多々見受けられます。

それぞれの教会名称の理は、おぢばからそれぞれの直属・上級を通じて、それぞれの教会の理の流れがあるとおぢばで聞かしていただきます。

教会長になられる方が、任命の理のお許しを頂戴して教会長になりますが、教会長になって一番最初に聞く言葉は、ぢばとそれぞれ教会名称の繋がりがどういう関わりか、一本の木にたとえてのお話です。

ぢばは根であり、それぞれぢばに繋がる教会名称は幹であり枝葉である。ぢばという根に、教会本部、そして直属という幹、部内教会という枝・葉、その一つひとつの理によって、それぞれ教会名称の理があると、その理は一つであると。しかしながら、枝が栄えるためには、しっかりと上級を通して、おぢばに理を運ぶことが大事だと聞かせていただきます。

そうしたときに、お互いよふぼく一人ひとりは、ただ祭典のつとめだけしていればいいのではなく、足繁く教会に運んで、その中に気づく一つひとつを、何か自分の真実として伏せ込みをすることが、真実の伏せ込みになりましょうし、教会名称にあっては、どういう事情があろうとも、上級教会にしっかりと足を運び心を運んで、御用としてさせていただくことが、をやに対する理づくりになり、をやが働いてくださって、よふぼくとしての大きなおたすけに繋がり、より大きな名称の理の栄えがそこに生まれてくるのではないかと思います。

## よふぼくとしての種まき

おつとめの奉仕者の数を増やすということを、年頭に申して、今つとめておりますが、一番大切な角目は、日々に、一人ひとりが真実の人を育てる理づくりをすること、真実を磨くことの大切さを申しましたが、それと同時に今度はよふぼくとして（おつとめ奉仕者もよふぼくですから）、よふぼくで真実の人ということを考えてみれば、よふぼく一人ひとりが、よふぼくとしての真実の種まきも合わせてつとめなければいけないと言えるのではなかろうかという思いから、今日のお話をさして戴きました。

今のお道の現状をみたときに、何か足らない。正直、先人よりも、むしろにをいがけ・おたすけに歩いてるはずなのに、何故かそこにをやにお働きいただけない何かを感じる。

親神様・教祖のお働きに何とも言えない喜び・満足感を感じている人はしっかり感じているけれども、その格差がひろがっている。今の経済ではありませんが、豊かな人はどんどん豊かになり貧しい人はどんどん貧しくなるのと同じように、よふぼくの中にも、勇む人はどんどん勇むが、下に行

けば、だんだん格差はひろがってくるという現実をみたときに、やはり、これはいけない。

せっかく道を信仰し、よふぼくとして、たとえわずかでもにをいがけ・おたすけというご用をしているお互いなら、せっかくのご用を通して、少しでもをやにお働きいただけたという喜びを持てなければ、勇んでこの道を通り、親神様のお望みくださる陽気ぐらしに向かうことが、なかなか難しくなりますので、よふぼくの皆さん方には、よふぼくとしての本当の喜びを味わっていもらいたいのです。

## 理づくりの先に見えたもの

私自身、年祭をつとめ終えた昨年、次の塚に向かってどう歩もうかと思う中に、少しでも親神様・教祖に働いていただけるような理づくりが何かないかと思案しました。せっかく、にをいがけ・おたすけし、おさづけの理を取り次ぐなら、そこで少しでも親神様にお働きいただけるような理づくりを何かしたい。

そんな思いもあり、また、日々おぢばに足を運びたいと思いつつも、なかなか運ぶこともできない。本当は日参をしたいけれども日参までは叶わない。何とか代わりのものをしたい、そんな思いから、毎日十二下りのおつとめをするようになりました。

すでに、多くの方がしておられますし、それまでにも願い事があって三日間とかはしたことがありますが、「毎日つとめ」という形で心を定めてしたことは今までありませんでした。

そういう形で昨年の九月から今日まで一年以上つとめられたというのは、大変有り難いと思いますが、そうすることによって、常に親神様・教祖に心を運び、そのことによって、日々通る中に、ほんのわずかな一言を受け取っていただいて喜んでいただける、そういうところにも神さんが先回りをして働いてくださる。おさづけの理を取り次いでも、神さんにお働きいただいたと実感できるようにもなってきた今日であります。

よふぼくだから無条件に神様が入り込んで働いてくださるのではありません。よふぼくならよふぼくとしての日々の理づくりをすることが、親神様・教祖に入り込んでいただいて働いていただく道筋ができるということを、今日この日に皆さん方には、しっかり心に置いていただきたい。

ただ朝晩に「ありがとうございます」だけではなく、をやに心を運ぶ中に気づく一つひとつを実行するだけで、をやが喜んでくださり、をやが働いてくださる道筋になるんだということを、しっかり心に置いてつとめ切れればありがたいなと思います。改めて、申し上げます。

たん〳〵とよふぼくにてハこのよふを
はしめたをやがみな入こむで　十五号 60
このよふをはじめたをやか入こめば
どんな事をばするやしれんで　十五号 61

これを、百三十年祭までに、よふぼくとしてしっかり味わえる、次の年祭に向かっての歩みにしたいと思いますので、どうぞよふぼくの皆様方にしっかりそのことを心に置いていただきまして、今後しっかりとをやに対する理づくりの上に歩んでいただきますようにお願いを申し上げます。

《以上要約》

# 後継者講習会

福芦分教会　竹本あい

今回、二泊三日で後継者講習会の為天理に帰らせて頂きました。

一日目、38母室でオリエンテーションを終え東礼拝場での開講式後、午後から教室にて第八次受講者の方と第一講一「親神様の御守護について先生からお話を聞きました。改めて御守護」を考えさせて頂き、ねりあいの中でもみなさんの御守護のお話を聞かせて頂き、勉強になりました。第二講一「たすけ一条の親心」についてお話を聞かせて頂いた後、記念建物見学に行かせて頂き、高校時代に一度行かせて頂いていましたが、今回違った見方ができ教祖の存在を身じかに感じる事ができました。第三講「成人への道」では西田伊太郎先生のお話を聞かせて頂きました。西田先生のお話の中では「まさかと言う坂」、「たら」「笑う事」が印象に残っており、「まさかと言う坂」では上り坂、下り坂と言う決まった坂の中で「まさか」と言う坂がある。まさかの中には良い事、悪い事の二つがあり事が起こるか分からない状況の中にある不思議な坂であると聞かせて頂きました。「たら」の話では～したらどうなるだろう？事が起ってしまった後にいつも考えるそうなのですが、一つお話をあげると、最近あった飛行機事故の中で、乗客が全員降りた後に飛行機が炎上した事故、それがもし乗客が降りていなかっ「たら」どうなっていただろう。時の差が起こってしまう事は難しい事ですが「たら」と考えると不思議な感じがしました。「笑う事」それは一番の特効薬なのでよく笑いなさいと聞かせて頂きました。西田先生のお話は楽しくすごく勉強になりました。後継者講習会では普段なかなか聞かないお話やみなさんとのねりあいの中で改めて自分の信仰を考え、信仰のすばらしさ、自分ができる事を考える時間を頂き本当に勉強になりました。二泊三日と言う短い期間でしたがこのような場の大切さ重要な時間を与えて下さり感謝します。

## 後継者講習会を終えて

福東分教会　石原妙子

参加するまでは、2歳になる子供が託児所に慣れてくれるかな、私自身妊娠しているので宿舎や教室への移動のことなどを考え無事に通ることができるかなと不安な気持ちでいっぱいでした。

講話をされた先生の話の中で、先のことはどんなことが起こるか分からないが、楽しみや喜びを見つけて通らしてもらうことが成人への道だと聞き、その日から私もそう考えれるよう通らせて頂きました。最初は努力して思うようにしないとできませんが自然と喜ばせてもらえるようになりたいと思いました。

最初は大泣きをしていた子供も2日目、3日目になると預ける時は泣いてもあとはほとんど好きなことをして遊んでいたと聞き、たくましくなったなあと喜ばせて頂きました。

無事3日間通らせて頂き親神様、教祖のご守護にいつも守られているんだなと思わせて頂きました。

最後に世話どりをして頂いた先生方本当にありがとうございました。

# 後継者講習会 第10次に参加して

芦加茂分教会　小川陽大

私は9年前の春におさづけの理をいただいて、自身としてはまだ20才という若さゆえに我が身助け人を苦しめといった心で通ってきたと今、思い返せば心苦しいと感じました。

当時そんな私でしたが親を見て、親の思いやりを受け止め心の入れ変えが出来たのかと振り帰れば喜びに変わりました、それからというものおぢばへは年に3，4，回程度、詰所のお風呂場天井の工事くらいしかおぢばへ帰る事をせず仕事が忙しいという言い訳をしていたのだと気づきました。この度の後継者講習会は今の自身を見つめ直したいという気持ちと汚れた心をきれいにしたいという気持ちがおぢばへと帰る気持ちにさせてくれたのだと思います。これから書く講習会へ参加した感想文は自分自身の心に偽りなく書かせていただきます。まず初日、オリエンテーションから始まり、たくさんの後継者の人の数にあっとうされた事が自分の心の中で「大丈夫かなぁ」と少し恐さを感じました。それは自身の汚れた心との間での葛藤だったのかと今はありがたく思えます。その後に始めてグループになった7名との出会い、緊張と不安の中で始まったウォーミングアップ終了時には皆の笑顔がすべての不安とおぢばへ帰る前の自身の心をきれいにしてくれた感覚でした。笠岡大教会として参加したメンバーとおぢばで一緒になったメンバーの人が話ししているのを見て喜びになったのが強く心に刻まれています。

講義の時間は先生の話を集中して聞いていたつもりが睡魔に襲われた事ははずかしながら、興味という2文字が欠けていたのかと思い「情けないなぁ」と自己嫌悪になっていました。しかし、その後のねりあいの場でグループの皆で話していたら、リーダーから「皆が皆完璧な人はいないよ」って言葉にすごく励まされた事に感謝の気持ちでいっぱいでした。

2日目の朝、朝起きはいつもの事ですが、寝惚けた状態で教祖お出ましお迎えと始めての体験に感動し、2日目の朝にして、最終日の皆との別れに寂しさを感じ涙が出た事が不思議な感覚でした。2日目ともなるとグループの皆、昨日までまったく知らなかった皆、心を開いてねりあいの時間を過ごせました。毎回、授業が終わるたびに「時間が少ないね」と私達のグループだけ教室で残っていろんな話をしてたなぁと思い出すだけで笑顔になれます。あのメンバーと出会ったからこそ自身の失いかけた心と喜びを取り戻せた、そう感じます。皆個々に身上や事情を抱えている事、今の自分自身がどれだけ幸せなのかを、今回の後継者講習会に参加させていただき、そして、すべての人に感謝の心を授かった事を含め、これからの人助けに繋げるよう、おつとめと日々感謝の気持ちを忘れずに、人生を歩んで生きて生きたいと思います。上手く話は出来ない私ですが、私の口から言葉になり出て来る言葉で人々を幸せに出来たらと思います。本当にありがとうございました。

# 第35回全教野球大会

福昭分教会　平盛秀年

第35回全教野球大会に監督として参加させてもらいました。この大会以前はよのもと会野球大会という名で行われていました。笠岡チームは第1回から第7回大会まで参加して、準優勝：1回、ベスト4：1回、ベスト8：3回と常に好成績で、私も1回大会から7年連続捕手として参加していました。そして8回目から人数が集まらなくて、次第に消滅していきました。そして約18年の間参加もなく、自然消滅のようになり、10年程前ぐらいからまた笠岡ワールドブラザーズというチームのもと、岡山教区の予選に参加し、岡山大教会との本大会をかけ、負けたり、負けたり、勝ったりという中、おぢばでの本大会になかなか一勝出きなかったのであります。私も何回か予選を見に行ってアドバイスもしていたのですが、今年初めて監督として予選、本大会に参加し、何とか一勝をというみんなの思いがつよく、10月28日に川之江大教会との一戦にのぞみました。試合の結果は9対1のコールド勝ちという思った以上の結果で悲願の1勝を勝ちとりました。残念なが2回戦は郡山大教会チームに6対2で敗れはいたしましたが、手ごたえのある戦いで来年もやれるという気がしました。なお郡山チームはベスト4になったと聞きました。

この全教野球大会の出場資格はよふぼくというのが条件であり、なかなか人数も揃いにくいのでありますが、今年から若い人が増えてまいり来年以後も楽しみです。そうした上から笠岡につながる、よふぼくで野球経験者がおられましたら、お声がけしていただき、一緒に参加して頂けるようよろしくお願いいたします。

# 初戦突破!!

米府分教会　三代幸徳

立教170年全教野球大会が10月28日から親里球場をメイン会場に、白川グラウンドなどで開催された。全教野球大会とは、全国の教会、教区のチームがそれぞれの地域で予選をし、各都道府県の代表として参加する、言わば、お道の全国大会で、笠岡ワールドブラザーズは4年ぶりの出場である。

私が初めて参加したのは去年の予選からで、そのとき大変悔しい負け方をしたので、今年に賭ける思いは一入で、去年の悔しさをバネにチーム一丸となり全教への切符を手に入れたときは本当に嬉しかった。

全教でのチームの目標は〝初戦突破〟。初戦の相手は初出場の川之江大教会であった。練習もほとんどすることなく全国大会という大きな舞台で緊張もあったせいか、なかなか自分たちの流れを作りにくかったが、そこは笠岡らしい、笑って楽しむ野球と、この初戦に賭ける皆の気持ちが相手チームを上回り、9対1で見事に念願の全教1勝を果たすことができた。去年の予選敗退から、この日の1勝を夢見てきたのだから、喜びで胸がいっぱいになった。

大会2日目、2回戦に進んだ笠岡ワールドブラザーズの相手は、強豪、奈良代表の郡山大教会。メンバーのほとんどが10代という郡山大教会の機動力野球に苦しめられたが、5回まで2対2の互角。しかし後半力尽き、惜しくも2対6で敗れてしまった。残念ではあったが、この大会を通して来年に向けての課題を見つけることができたし、近年には無いダブルプレーを取ったり、年齢に関係なくガッツ溢れるプレーが飛び出したりと、多くの収穫もあったし、そして大きな怪我もなく最後まで皆が精一杯プレーでき楽しみ喜び合えたことが何よりも良かったと思う。また、私は小学4年から今まで13年間野球をやってきたが、年の離れた弟と同じチームでグラウンドに立つ機会は無かった。今回、私の野球人生において初めて弟と一緒にプレーできたことが、この笠岡ワールドブラザーズに参加して一番嬉しかった事で、何不自由ない身体で野球ができるということ、更に、弟と一緒に野球ができるという喜びを感じながら試合できたこと、笠岡ワールドブラザーズに誘ってくださった大教会の上原志郎さん、チームメイトの皆さん、応援してくれる両親に感謝の気持ちでいっぱいです。本当にありがとうございました。

私たちが野球をできるのも、この元気で健康な身体を使わせていただけるからであります。私の尊敬する野球選手に、桑田真澄という選手がいます。彼は38歳にして、メジャーリーグに挑戦し勉強をしたいといういつまでも夢を追い続ける姿が私は好きですが、それだけではなく、彼の感性に尊敬しています。というのも、桑田選手は9月に足首の手術をしたのですが、その後の彼自身のブログにこのような事が書かれていました。「…命があること、健康であることが、こんなにも有難く重みさえ感じるね。元気な時は、こんな気持ちにはなれないし、考えもしないけど、生きていること、健康であることが、とてつもなく凄いんだなと思う。名誉や富、権力、学力、実力など、それはそれで大事かもしれないけど、そんなことよりも、まず、生きていること、健康なことが1番に大切だよね…。」と。信仰あるないに関わらず、このように感じられる桑田選手の感性は素晴らしいと思います。私にとって、笠岡ワールドブラザーズは始まったばかり。常日頃から当たり前が当たり前でない感謝の心を忘れず、来年の全国大会に向けて一歩一歩成長していければと思います。

野球はとても魅力あるスポーツです。それは、順番に打席に立つので選手みんなにヒーローになれるチャンスが巡ってくるところにあると思います。そして、9人それぞれの特徴を生かしてポジションを組み立てることができるため、老若男女を問わず幅広く受け入れられるスポーツであります。この野球を通してよふぼくになった方もおられます。新たな野球大好きメンバーをいつでも募集しています。私も是非やってみたいという方がおられましたら、大教会の上原志郎さんまでご連絡下さい。資格はよふぼくであれば、誰でも参加可能です。野球を通して、笠岡に繋がるよふぼくの輪を広げ、絆を深め合えたらと思います。

皆様、これからも暖かい応援よろしくお願いします。ありがとうございました。

▼養徳社発行『陽気』誌十一月号、「道柳」より転載

▽今回の課題は「久」、選六十七句中、笠岡に繋がる教友の方一名、一句が見事選ばれ掲載されていましたので転載させて頂きます。おめでとうございます。

秀　詠　東悠分教会前会長夫人　田　林　美智子

節目の日初代の道を久に説く

▼表紙の切り絵　芦品分教会　佐々木ふさ子さん（よふぼく）

# 談話室

## ある日のレストランで

私は、月に一度はK市へ出かける用件があります。その折、昼食のためバイキングの店をよく利用します。ここは安くて品数も多く、バラエティに富んでいて、楽しい食事ができるので嬉しい店なのです。人気もよくいつ行っても大勢の人で賑わっています。がしかし、いつも気になることがあります。それは残飯の量です。バイキング方式なので、何をいくらでも皿にとっていいわけです。故に人間の欲はこんなところにも、如実に現われるようです。喰わねば損、とらねば損とばかり、しこたま皿へ盛る人が多いのです。人間の胃袋はたかがしれています。喰えるだけずつ何回でもとってくればいいのですが、そんなことはおかまいなしです。見ていて、そんなに喰えるんですか、と云いたくなるほどです。いきおい残飯になります。テーブルが多いだけに、その量は半端ではありません。

よく見ていると、若者だけではなく中高年層も結構多いのです。その中でも我慢ならない風景は、子供連れの若い夫婦の食べ方です。子供がどれだけ食べるかは、親が一番よく知っているはずです。しかし、とらねば損とばかり盛りあげて皿にとるから、食べられるわけがありません。子供達の前で大量に残して立去るわけですから、子供は〝食べ物は残してもいいんだ〟という思いが植えつけられてしまいます。その子供がそのまま大人になるから、これは末恐ろしい話です。

もったいない、の心などあろうはずがありません。

今、世界中で食べ物がなくて死んでいく人は、一日に四万人から五万人といわれています。今の日本では考えられない出来事ですが、これは現実です。よその国の事だとのんびりしてはおられません。現にオーストラリアが旱魃で小麦に打撃を受けています。それが日本にどう影響するか、いわずとしれたことです。教祖は

「菜の葉一枚でも、粗末にせぬように。」

「すたりもの身につくで。いやしいのと違う。」

――教祖伝逸話篇 百十二――

と仰っています。

話はかわりますが、この店でもう一つ気になることがあります。それは箸の文化が崩れている現象です。日本独特の文化はたくさんあります。畳の文化、障子の文化、床の間の文化、壁の文化、茶の文化、花の文化と教えればきりがありません。その中の一つに箸の文化もあります。箸の使用にはいくつかのタブーがあります。例えば、迷い箸、ねぶり箸、渡し箸、つつき箸等々、まだまだありますが、見ていると箸の持ち方がデタラメです。特に若者や子供達に多いようですが、あの持ち方でよくもまあ、物がつかめるもんだと妙に感心してしまいます。

箸の持ち方一つ、躾られていない子供達が親になっているわけですから、我が子にも躾られるわけがありません。

日本のあらゆる文化は、こんなところから崩壊していっているようです。〝美しい国日本〟どころではありません。私達道の者から〝もったいない〟を実践していきたいものです。

# 十一月月次祭祭文

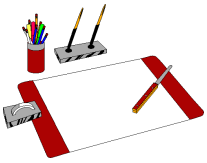
これの笠岡大教会の神床にお鎮まり下さいます
親神天理王命の御前に　会長上原理一　慎んで申し上げます
　親神様の子供かわいい一条の慈しみ深い親心によります天然自然のお働きや　私達の心一つの理にお貸し下さっております身体の自由の御守護のままに　日々は結構に恙なく生活（くら）させて頂き　心の成人へとお導き下さっております事は誠に有難く勿体ない極みでございます　教祖を通して救けて頂いた私共は　日々生かされている喜びを胸に朝夕に御礼申し上げつつ御恩報じを思いに念じて　世界一列救けたいとの思召にお応えするべく「つとめとさづけ」「にをいがけおたすけ」を通してたすけ一条の御用の上に勤め励ませて頂いております
　分けても今日二十一日は月毎の御祭を執り行う目出度い日柄でございますので　只今からおつとめ奉仕者一同　喜び心を一つに睦び合って明るく陽気に勇んで坐りづとめてをどりをつとめて十一月の月次祭を執り行わせて頂きます　御前には今日の日を楽しみに寄り集い　日頃の御高恩に改めて御礼申し上げ尚も変わらぬ親心にお縋りする状を御覧下さいまして　親神様にもお勇み下さいますようお願い申し上げます
　さて　今年もあと一ヶ月余りとなりました　年頭に定めた心定め完遂に向け精一杯成人の歩みを進めさせて頂いておりますが　遅々たる歩みにも関わらず親神様には温かくお見守りお連れ通り下さっております事　喜びよりも申し訳ない気持ちで一杯でございます　只私共の成人の歩みよりも世の中が荒んで行く方が早い現状を思う時　立ち止まったり躊躇している場合ではありません　本年は元より次の塚へ向かっておつとめ奉仕者増員を何をしてでも果たすべくたすけ一条の御用の上に邁進させて頂く覚悟でございます
　何卒親神様には親孝心一筋に脇目もふらず　成人の歩みを進める皆の誠真実の心をお受け取り下さいまして　万たすけの上に尚一層の親心を頂戴し　自由の御守護をお現し下さいまして　用木一人ひとりの真実が未だ道を知らぬ人々に一人また一人と伸び広がって行き　お望み下さる陽気ぐらしの世の状が一日も早く実現しますようお導きの程を　一同と共に慎んでお願い申し上げます

## ・原・稿・募・集・

**内　容**　①小随筆　②教会・布教所の独自の活動の紹介
③俳句・和歌・川柳　④教会行事開催後の報告記事 等々

**字　数**　１０００字前後（８００字～１２００字）
題名・所属教会名・氏名を明記して下さい。
俳句等は１句からでも結構です。

**寄稿先**　下記、大教会内『かさおか』編集掛宛ドシドシご寄稿下さい。
郵　便：〒714-0066 岡山県笠岡市用之江３７７
ＦＡＸ：０８６５－６６－１３１４
メール：**tenkasa@yahoo.co.jp**
尚、原稿はお返し致しませんので、予めご了承下さい。



# 大教会だより

## ＝教会指令＝

### ◎移転建築願

東悠分教会

＊移転元

東京都世田谷区桜新町一ー二五ー二一

＊移転先

東京都町田市つくし野三丁目一四番地五

☆奉告祭　立教170年12月9日

### ◎第七九七期修養科

自　立教170年9月1日
至　立教170年11月27日

＊教養掛

三ヶ月間　岡﨑和夫（弥高山分教会長）
一ヶ月目　高島定彦（出雲分教会長）
二ヶ月目　上原志郎（大教会役員）
三ヶ月目　瀬良善彦（高千穂分教会長）

＊修了者

笠岡柴田卓志
陶山上原繁次
弥高山岡﨑ひさよ
陶山上原宏恵
葦沼三島直美

### ◎教会長資格検定講習会修了者

後期　立教170年11月19日終講
稲倉北川雅子

前期　立教170年11月14日終講
大江橋村川明

今年五月上旬のある日、教会の玄関先で四人が立話をしていた。すると一人のおばさんが、「あねえなとこれえホオジロがおるで。」と云う。みると二羽のホオジロがサツキの枝から枝へ忙しく動いている。

するとそのおばさんは何を思うたか、サツキの下に置いてあるタヌキの置物へ近づき、それをパッと持上げた。一体何をするのかとわけの解らぬまま見ていたが、おばさんはタヌキの腹の中から鳥の巣を引っぱり出したのである。何とその巣の中には、生まれてまだ二、三日の丸裸の赤いヒナが三羽いるではないか。三人はあわてて「早よう元へ返しんせえ。」巣をもとにもどしたが、見ていると二羽の親が交代で一度づつ巣の中へ入ったが、やがてどこかへ飛び去ってしまった。そして二度と帰ってはこなかった。

三羽のヒナが哀れでならなかった。人の手で育てるにはあまりに小さすぎるし、素人の手におえるものではない。

自然界に人間が迂闊に手を出すものではないし、野性の動・植物にチョッカイは禁物である。云い替えれば、神様の懐にヅカヅカと踏み込むものではないと思う。

諺に〝やはり野におけレンゲ草〟という。　（か）